

プトの蒐集とその厳正な解説の作業がさらに少しでも多く積み重ねられることと、エジャートン文典などをさらに補正してゆくことと、が要求されるであらう。後者については、諸経のいちいちに用語の精細なコンコードダンスを作ることが必要である。近來、論書については梵・藏・漢のずいぶん精密な索引がいくつも出されて、語の用法や語義の確認に新しい大きな進展が見られた。經典についても入楞伽經(鈴木)・般若經(コンゼ)・迦葉品(ヴェラー)・金光明經(ノーベル)などの業績はあるが、なお甚だ十分と言つてよい。長谷岡氏の入法界品語彙などの公けにされる日を期待する。

(3) 読み易いということ。——読み易さが欠ければ、經典現代語訳の意義の大きな部分が失われることになる。しかし、一つの言語で書かれたものを正しく理解することと、それを他の言語で平明に表現することは、必ずしもあい伴わない。訳の厳密さと読み易さとは補充するよりもむしろ競合する。次に、既成の漢訳語のとり扱いの問題がある。その語感是他をもって換えがたいとする考え方と、逆にほとんどそれを忌避するように見える考え方が、現に存在する。卑見は、その範囲を厳しく限定し、そのかぎりにおいて、積極的に漢訳語を活用すべきものとする。特に重要な仏教用語がただ現代語の形に改められることによつて、読者によるその正しい理解はおおいに促進されると思われぬ。また、さらに、耳で聞く経と眼で読む経との違いに思いを致す要がある。阿含經典のみならず大乘經典も、本来、口で誦せられたものを耳で聞くべきをその本質として、成立していると考えられ

る。しかるにこんにちの現代語訳經典は文字に書かれたものを眼で読むべく提供される。そのギャップは、ことに「厳密な」そして「読み易い」訳を目指すとき、看過し得るものではない。

(4) 選択の問題。——数百篇にのぼる大乘經典の中から、いづれを選んでその現代語訳を出だすかという選択については、シナ仏教以来の教相判釈や、平安・鎌倉時代以後の日本仏教諸宗の立場から、はっきり脱却して、その視点を定めることを必要とする。それらを離れて、經典をそれぞれその本来の土壌に返して見直すという考え方に立たなければ、經典を「現代に生かす」ということもその研究分野に「新しい展望を開く」ということも、不可能であらうと思われる。

謙敬聞奉行

本學助教 白井元成

現代社会は情報化社会であるとか、知識産業社会であるとか、或いは脱工業社会、乃至は人間関係断絶の時代であるなど、種々なる表現をもつて語られなければならないほどに、極めて複雑不可解にして混迷せる時代である。しかるにその混迷の根源を尋ね求めるとき、実にそれは合理的精神によつて齟らされた、人間至上主義によるものといつても、けつして過言ではない。まことに、すべてを自己中心的に考え、一切を合理的に理解しようとする

ることのみが先行し、真の人生成立の基盤としての敬虔感情の稀薄なる現代を痛感せずにはいられない。かかる時代社会にあって、『無量寿経』の「謙敬聞奉行」なる経説、それは聞法の心がまえを示すものではあるが、そこにわれわれの本来的なあり方が端的に指教されてあるのを見る。しかれば、いかなるところに「謙敬聞奉行」のみちが開顕されるのであろうか。

「謙敬聞奉行」なる経説は宗祖親鸞によって、真実之教浄土真宗、即ち大聖の真言ここにありといひ切らしめた『無量寿経』下巻に展開する「東方偈」又は「往觀偈」と呼ばれる偈頌のうちの一偈である。『大経』には、全体三つの偈頌を存する。すなわち、上巻の五十三仏の伝統について出す「嘆仏偈」、法蔵菩薩の四十八の誓願について、重ねてその本願の満足成就を誓う「三誓偈」並びに、今の他方仏国の菩薩の往觀を讃歌する「往觀偈」である。前の二偈は真宗の勤行にも用いる周知の偈であるが、「往觀偈」は読誦にもあまり用いない、なじみ少ない讃歌ではある。しかしながら、本経の精神を理解する上において、これら三偈はいずれも重要な意義を有し、互に有機的な連関を保ちつつ、『大経』の真精神を鮮明ならしめている。

しかるに「往觀偈」は梵本（マックス・ミューラ博士・南条文雄博士によるオックスフォード本や、荻原雲采博士の改訂本）によれば、その安処が二分されてある。すなわち、「若人無善本不_レ得_レ聞_二此経_一以下、つまり、今主題とする部分をも含めて、これを終りに近いところ、すなわち、弥勒菩薩にこの経を付属した直後に出している（岩波文庫本『浄土三部経』上二一三頁の第四

十四章がそれに相当する）。従って、梵本によれば『無量寿経』には四偈あることになるが、漢訳が十二訳（五存七欠）あったと録することく、梵本もただこれ一本のみと即断することはできない。従って、現存する梵本がそうであるからといって、直ちにそれに従わなければならないものではないであらう。宗祖が正しく依用された康僧鑑訳の『無量寿経』のごとく、一連のものとして見てゆくことが、われわれに与えられた最も妥当な道である。

宗祖が『大経』の宗躰について、「教巻」には「説_二如来本願_一為_二経宗致_一、即以_二仏名号_一為_二経躰也_一」との確に把握され、また『銘文』には、「大無量寿経言といふは四十八願を説きたまへる経なり」といいがらわれているごとく、上下二巻を通して仏の願いを説くことにひたすらなる經典が『大経』である。従って、如上の三偈もその叙述内容・位置などから、それぞれに、その仏願の選択と廻向と成就とを明かすという必然的關係にあることを知らしめられる。即ち、「嘆仏偈」は本願選択のころを、「三誓偈」は本願廻向のころを、「往觀偈」は本願成就の相を明らかにしているのである。しかるに、その本願成就の相とは「諸仏告菩薩、令_レ觀_二安養仏_一。聞_二法樂受行_一、疾得_二清淨処_一。」とか、「其仏本願力、聞_二名欲_一往生、皆悉到_二彼國_一、自致_二不退転_一。」とあるように、ことに聞法ということのいかに重要であるかを一貫して説くことによって、聞法こそ本願成就の具体相であることを指教せんとするものである。

かくて、聞法の本願資格について「若人無善本、不_レ得_レ聞_二此経_一」、「清淨有_レ戒者、乃獲_レ聞_二正法_一」、「曾更見_二世尊_一、則能信_二

此事」と三を挙げて讃歌している。つまり、善本・持戒・値仏の因縁あるをもって聞法の精神資格としてゐる。しからばこれら三つの資格は一体何を意味するものであろうか。恐らくは、それは「信心欣喜者」の過去の想い出となるものを列挙したのであるが、しかもこの偈頌の終りに近いところに、「壽命甚難得、仏世亦難値。人有信慧難。若聞精進求。」とあることから推求するならば、聞法の因縁が、いかに難値難見なる世界であるかを説き明かそうとするものであるといわねばならない。しかもかかる聞法の因縁を難値難見ならしめている原因は奈辺にあるのであるか。

如上の三精神において「謙敬聞奉行踊躍大歡喜」せしめられるというのであるが、偈頌はその直下に、それに相反するものとして、傲慢と幣と懈怠とをあげ、それをもってしては本願念仏の法の聞信し難いことを指摘している。そしてこれらはいずれも身の現実を暴露するものであつて、かかる身の現実に対する深い自覚なしには本願の大道に値い難いことを明らかならしめている。

傲慢とはわれ賢しというころ、つまり、自分はすでに法を得たということである。それを聞法の精神に対比するならば、第三の値仏の因縁をみとめないものである。従つて、そこに謙虚なる敬虔感情は出るべくもない。かくて、われわれは法を聞かんとするとき、傲慢あるが故に、へり下ることなく、自らの智慧をもつて分かつたのである。値仏の因縁はそうした自らの智慧をもつてしてはどこまでいっても感得せられるものでない。傲慢がみごとに打ち破られ、遇い難き法にあうという、深い喜びの上に立

つて教えを聞くとき、自ずからに頭が下つて聞かれるのである。幾度も幾度も仏に値いながらも、傲慢のこころの捨てがたい現実の身の事実の発見、そういう中へのみ、謙虚のこころが出てくるのであり、値仏の因縁が喜ばれるのである。

幣とはおおうという意味で、それはいつでも聞けるというような心情である。したがつて、聞法の座にありながら、その実聞いていない。それは聞いても聞かざるがごとしであつて、従つてそこに善い心がけの生ずることなく、却つてそれが聞法を妨げることになる。およそ聞とは聴聞と熟字し聴も共に同じくきくということであるが、聴には人間の意識分別心をもつてきくという面が強い。それに比し、聞はそうした執着が破られ、聴をこえ意識分別をこえて開けてくる世界であるといえよう。聞即信といわれる所以もそこにある。従つて宗祖は「言聞者、衆生聞仏願生起本末無有疑心」といい、信については「言信心者、則本願力廻向信心也」と、更には「信心は、如来の御ちかひをきゝて疑ふ心のなきなり」と領解していられるごとく、如来のまことが徹底して疑がなくなるのが信である。つまり、こちらの閉ざれた世界がくだけて、如来のまことが私の心に開け来る。それが聞の世界であり、従つて、それはきくのではなく、聞えてくる世界である。かくて「若人無善本、不得聞此經」という聞法の資格としての善本とは、自らに善本がなくてはいけないと客観的に外に眺められるのではなく、「遇獲修行信遠慶宿縁」といわれるごとく、それは信心の世界のうちから慶ばれて行くものであることを指教するのであつて、そこに深い難値難見の世界が示され

てあるといえよう。

更に懈怠とは、なまけて善事に精励しないことで、明らかに奉行の反対を示すものである。既に七仏通誡の偈をみて「諸悪莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸仏教」といわれるごとく、戒をたもつことは仏道の第一歩である。しかるに、宗祖は自らに「無戒名字の比丘」という。それは戒が不必要であるというのではない。戒は仏道を志すものの当然のみちであり、守らねばならないものであるが、一戒をもたもつことのできない身という、自らの現存在への深い悲しみと敵しい懺悔のころろを示したものであって、従って、そうした恥傷の自覚に立つとき、はじめて如来の行に参加せしめられるということである。つまり、単に戒を否定するものではなく、一戒をもたもつことができなない身であるけれども、戒の精神をも失ってはならないことを教示するものである。かくして不清浄なる身に清浄の戒のたもてるはずはなく、聞によつて真實信心にめぐめるとき、われわれは凡夫をやめることなく、凡夫は凡夫のままに、如来の行を行ずる、大悲の行を行ずることとなる。具体的にいえば念仏申さるということであり、懈怠にめぐめることによって、はじめて本願のまことに真にふれうることを指教するものである。まことに聞法の精神資格を語ることは、同時に、内に遇法・聞法の縁がいかに難値難見であるかを知らしめ、その根源を明らかにし、もつて、橋慢・幣・懈怠なる身の事実の発見恥傷あるところに開け来る世界であることを明らかにしめらるものである。

かくて、かかる謙敬聞奉行の具体的なすがたを、われわれは宗

祖の本願聞思のみちに見出すのである。まことに謙敬聞奉行の経説は「世人薄俗にして、共に不急の事を諍う」とあるように、急がなくてもよいことを必至に追い求め、急がなければならぬことと大事なことに怠け、忘れて求めようとしなない、われわれの現実生活への覚醒をうながすものであって、そこに謙敬聞奉行と、大悲の心を聞いて、大悲の心を行じてゆくという聞法の心構えを示すことによって、人間の本来的在り方をみごとにいいきっているものといえる。従って、それは、真の人間成就のみち、混迷せる現代社会超剋のみちここにありということを示すものでありといえよう。

性格形成と教育

本學助教 大 竹 鑑

「教育はあれこれの知識を与えるのではなく、人間の存在を根底から変えることだ」という言葉は今日ひとの口によくされる。この目標を達成するために、「学校」はどのような役割を分担できるか、学校教育の限界と可能性を明らかにすること、教育学の主要な研究領域である。人間はさまざまな学習を通じてその性格を形成する。学校教育で可能な学習形態は何かというのが今日のテーマである。性格を、ここでは、その人らしさ、その人ならではの行動特徴、何らかの問題に対する感じ方、考え方、態